1　巻頭言　～「親の力」をまなびあう学習プログラムについて ～

「『親の力』をまなびあう学習プログラム」検討委員会委員長（安田女子短期大学教授）　橋本　信子

昨今，親の教育力低下やモラルの低下を裏付けるかのような出来事が頻発しています。子殺しや虐待に始まって給食費未納に至るまで，“いまどきの親”を象徴する出来事は枚挙に暇がありません。プログラムを開発するにあたって，“いまどきの広島県の親”に対する共通理解を図るため，委員全員で広島県教育モニターアンケートを拝読いたしました。記述式回答には，子供を育てている親たちが誰によって助けられ，何を学んだかが記されており，多くの人が親への関わりを通して子育てに参加している実態が明らかにされていました。「近頃の親はなってない」「親の務めを果たしていない」など，“いまどきの親”には耳の痛い言葉が発せられています。しかし，教育モニターアンケートに見られるような，子育てに真摯な態度で向き合っている人が多く存在していることも心に止め，プログラム開発にあたりました。

子育てに喜びや楽しみを見いだす姿は，他者と対話し，励ましやアドバイスを受ける過程で出現している例が多いことから，学びたい・支えたいと思う人に語り合う場を提供することで，親の教育力向上が図られるのではないかと考えました。この考えによって，教授型学習プログラムではなく参加型学習プログラムの開発を目指すことになり，指導・伝授者タイプのインストラクターや専門家ではなく，促進・媒介者タイプのファシリテーターが進行役を務める実施方法を選択することになったのです。

さて，「『親の力』をまなびあう学習プログラム」という名称の「親の力」とは何を示しているのでしょうか。一般的に，「親の力」とは，“子の教育について第一義的責任を有する者”が，わが子に発揮している教育力を指しますが，子供を育てる責任を有しているのは親だけではありません。社会も“社会の宝”である子供の育成にあたる責任を担っています。わが子に対して第一義的責任を果たす力と社会の一員として子供を育成する力とが一体となった“子育て力”，つまり，人を育てようとする人なら誰もが持っているであろう“親心”から発せられる力を，本プログラムでは「親の力」という言葉で表現しました。真の「親の力」とは，常に良い方向へ導くものであるという前提に立ち，だからこそ“まなびあう”ことができるのだという思いがプログラムの根底に流れています。

本委員会は，このプログラムにひとつの願いを託しています。それは，プログラムの実施をきっかけに，点在する「親の力」を集結させ，学び合いと支え合いのなかで明るい子育て社会を構築していただきたいという願いです。時代は，多くの世代が子育てに関わっていくことを求めています。このプログラムをまずは同世代間の取り組みとして定着させ，さらに異世代間で交流できるプログラムに発展させていくならば，子育ての知恵が世代間で受け継がれる機会にもなり，よりよい子育て環境を次世代へ継承するシステムが形成されていくと考えています。子育てに関わる人間が子育てに疲れ切っている社会に未来はありません。広島県に暮らす人々が，子育てを通して実感する豊かさや幸福感，それがこのプログラムによってもたらされ，社会全体で“いまどき”の子育てを再構築し続ける取り組みになることを願ってやみません。

今回提示するプログラムは，8 段階 3 つずつの計 24 ユニットで構成されていますが，あくまでも基本形です。県民の皆様のニーズに対応できる新たなユニットを，今後もご提示できるよう努力してまいる所存です。「『親の力』をまなびあう学習プログラム」が社会に定着したプログラムになっていくためには，多くの方のご指摘やご提案が必要です。忌憚のないご意見を頂戴し，まなびあう楽しさで子育ての輪が広がり，交流を深めるなかで「親の力」が高められるプログラムに改善してまいりたいと思っております。

最後になりましたが，「『親の力』をまなびあう学習プログラム」のために，ご指導，ご支援を賜りました関係機関，団体等の皆様に心から御礼を申し上げます。

平成 20 年３月

平成 24 年度改訂に寄せて

「『親の力』をまなびあう学習プログラム」検討委員会委員長（安田女子短期大学教授）　橋本　信子

「『親の力』をまなびあう学習プログラム」を世に送り出して，はや４年の歳月が過ぎました。

その間，学習プログラムの改善に向けた貴重なご意見を数多く頂戴し，できる範囲の修正を重ねてきましたが，このたび，全てのワークシートと『学習のすすめ方』を再検討し，新規開発のワークシートを加えた改訂版を刊行する運びとなりました。このような機会が与えられたことに対し，関係各機関に厚く御礼申し上げます。

「『親の力』をまなびあう学習プログラム」は，平成 18・19 年度“家庭教育支援総合推進事業”（国の委託事業）として開発され，平成 20 年度からは“家庭教育応援プロジェクト事業”（Ｈ20～22 単県事業）“家庭教育支援事業”（Ｈ23～単県事業）として本格実施に入りました。平成 23 年度までの 4 年間で 575 回の講座が開催され，受講者は 12,934 名に達しています。

一方，講座の進行役を務めるファシリテーターの養成は，学習プログラムの普及・発展の鍵を握るものと考え，力を注いできました。平成 20 年度からの 4 年間で誕生したファシリテーターは，357 名にのぼっています。ファシリテーターの活動は，今や二つの役割を持つようになってきました。一つは，講座の進行役として家庭教育の向上に寄与する役割です。参加者一人ひとりから“親の力”を引き出し，学びあう場を作り上げることで，家庭の教育力向上を図ろうとしています。今ひとつは，地域の教育力再生を生み出す役割です。現在，ファシリテーターが地域ごとに連携し，他の地域のファシリテーターと交流する動きが始まっています。こうした交流の輪が広がり，さらに継続されることで，地域の教育力再生が力強さをもって促進されていくと考えています。

幸いにも，学習プログラムの参加者の中からファシリテーターが誕生し，ファシリテーターの中から養成にかかわる方も輩出されてきています。誰もが，学習プログラムを体験する中でその意義を実感されており，だからこそ，持続可能なシステムを作り出そうとしています。“まなびあい”のテーマが時代を反映していることも，持続可能性を高める要素と考えています。今回，「父親」「ケータイ」という話題性のあるテーマをワークシートに加えることができたのも，持続可能なシステムをめざすなかで実現したものです。

「『親の力』をまなびあう学習プログラム」の名称における「親の力」とは，我が子に対して第一義的責任を果たす力と，社会の一員として子供を育てる力とが一体となった“子育て力”，つまり人を育てようとする人であれば，誰もが持っているであろう“親心”から発する力を表しています。人間は，生涯をかけて成長し続ける存在です。育つ過程で生み出される「親の力」は，様々な形で現れます。我が子を育て，地域の子供を育てていこうとする“親の力”，親を支えそして育てようとする“親の力”，子供やその親達のために，社会をよりよくしようとする“親の力”。いつの時代にあっても，“親の力”は，人を人として育て，社会を育ててきました。子供達が“社会の宝”であるのと同様に，大人達が紡ぎ出している“親の力”もまた，“社会の宝”に他なりません。『「親の力」をまなびあう学習プログラム』は，プログラムにかかわる全ての人と共に，“親の力”が子供の最善の利益の為に，最大限の努力を行う力であり，広島県の家庭と地域を支える底力であることを示し続けてまいります。

最後になりましたが，「『親の力』をまなびあう学習プログラム」に御協力いただいた関係機関，団体等の皆様に心から御礼を申し上げるとともに，改訂版「『親の力』をまなびあう学習プログラム」が持続可能なプログラムとしてさらに発展を遂げますよう，これまで以上のご指導，ご鞭撻をお願いいたします。

平成 24 年６月